

## II 安見右近と私部城

### 1、安見右近の登場

三好長慶は、永禄2（1559）年6月と永禄3年6月に河内に出兵し（史料62～65）、永禄3年10月24日には飯盛城が、27日には高屋城が長慶に明け渡された。そして、長慶が飯盛城に、長慶弟実休が高屋城に入った。これに対して畠山高政や安見宗房は、永禄5年2月から軍事行動を開始し（史料70・71）、3月5日には和泉久米田寺の合戦で三好実休を戦死させ（史料72・73）、高屋城を押さえた。すると安見宗房らは飯盛城攻めを開始する。また、摂津衆などを引き連れた三好義興らが、5月20日の河内教興寺の戦いで畠山方の湯川直光を戦死させ、飯盛城攻めていた畠山勢は総退却となった（史料74～76）。この時、安見宗房は、大坂に逃げ、息子の野尻孫（満）五郎は、鷹山谷へ退いたとする史料がある。

このように、畠山氏の河内支配が三好氏によって奪われる頃、安見右近の姿が見えるようになる。それは、本願寺蓮如末子実従が残した日記『私心記』に登場する（史料60・61・66・68・69）。実従は永禄2年11月30日に大坂本願寺から河内枚方順興寺に移住した。右近の動静がわかるのは、その後からである。永禄2年12月20日条では、安見が枚方寺内の家を差し押さえようとしている（史料60）。これを従来、安見右近と解釈している（草野04、鍛代08、馬部09）。この時期は、まだ河内は畠山氏の支配下にある。また、翌年1月3日条では、安見与助が枚方に宿を持っていることが判明する（史料61）。与助は右近の同族と考えられる。

永禄3年10月、河内は三好氏の手に落ちた。三好長慶が飯盛城主となり、河内北半国を支配した。ところが翌年の永禄4年1月17日条には安見右近が星田に居ることがわかる。右近は、星田を支配していたのである（史料66・史料98）。ま

た、畠山高政及び安見宗房没落後も右近は健在であった。恐らく、三好氏の被官になった可能性があろう。飯盛城の周辺の領主は、三箇島の三箇氏や飯盛城の東に位置する田原氏など三好長慶の被官となった河内の在地領主がいる。右近もそのひとりと考えたい。

### 2、天下再興の戦い

永禄8（1565）年5月19日、將軍足利義輝が、三好三人衆や松永久秀らによって殺害された（史料79）。その前年三好長慶は病没し、後継の三好義継を擁しての強行であった。これにより、反三好方は活気づき、畠山方は各地の大名に出陣を要請しはじめるのが、6月段階からで、「天下御再興」を促している（史料80・81）。8月には丹波で、松永久秀の弟内藤宗勝が自刃し、10月には大和方面では安見右近や筒井藤勝も活動を開始する（史料82）。11月15日には、三好三人衆が飯盛城を攻め、三好義継を奪う（史料83）。義継は、この時数え15歳であるから、どれだけ主体的な行動であったかわからない。これ以後、松永久秀と三好三人衆との関係は完全に断たれた。

この年のものと思われる12月18日付松永久秀宛遊佐教（信教）書状に、「安見右近允の儀、先書申し候如く、長々召し置かれ候、」とあり、遊佐信教と松永久秀の同盟が成立していたことがわかる。そしてこの同盟の要として安見右近を長々召し置いてくださいと書いているのである（史料84）。右近は、一旦、三好被官となつたが、將軍暗殺を機に筒井藤勝らと連携して大和で蜂起し、これを見た遊佐教は、安見右近を松永久秀に与えて、天下再興の戦いを始めようとしたのであろう。以後、右近は久秀方として活動する（史料85）。

三好三人衆と松永久秀の戦いは、当初、三人衆方が圧倒的に有利であったが、永禄10年2月16

日に入ると、三好義継が松永久秀と同心する（史料 86・87）。そして、久秀は義継を伴い、信貴山城に入り（史料 88）、続いて多聞山城に入った。これにより三人衆方が奈良に結集し、遂に東大寺大仏殿炎上となるのである（史料 89）。

この頃になると、8月23日には飯盛城の松山安芸守が久秀方に寝返った（史料 90）。しかし、翌9月6日には三人衆方が飯盛城を取り戻している（史料 91）。更に、10月22日には、飯盛城のすぐ東に当たる田原の坂上氏が久秀方に裏返ったため、久秀は多聞山から飯盛城に500人を入れている（史料 93）。また、永禄11年1月には河内の津田、南山城の田辺も久秀方となり、「河内通路これなし」といった状態であった（史料 94）。これに乗じて三好義継は、多聞山城から河内津田城に入城している（史料 95）。久秀方は、信貴山城や多聞山城などを本拠に南山城や北河内地域を一部掌握できる状態が生じたのである。さて、右近の活動だが、永禄10年9月10日に、大和で筒井方の井戸勢と戦い負傷している（史料 92）。右近は久秀の近く、大和方面で戦っているようである。

一方、前述したように、永禄11年2月5日付篠原長房賦がこの時期発給されている（史料 96）。これは、鷹山藤政の後継と思われる鷹山藤寿の訴訟によって出された古文書である。交野郡私部郷の内、鷹山氏が支配していた大塚分らの土地が没収されていたため、あらためて篠原長房が藤寿に与えたもので、忠功を励むことを命じている。松永久秀が飯盛城・津田城・田原城を掌握しかけていた時期であり、私部城はそのなかで孤立していたと考えられる。このため、藤寿に私部郷を与えて北河内の状況を変えることが目的であったと見られる。この後、信長が上洛した時、飯盛城は三人衆方の城であるため、藤寿らは再び飯盛城を奪還したと見られる。

### 3、織田信長の上洛と私部城の登場

永禄11年9月26日、織田信長が足利義昭を伴って上洛した（『大日本史料』永禄11年9月26日条）。これにより、三好三人衆方は悉く没落し、畠山高政・秋高親子、三好義継、松永久秀や、三人衆方であった摂津池田氏などが義昭に帰参した。この時期の畿内の武士は、将軍足利義昭の幕府に結集したのであり、織田信長と被官関係を結んだのではない。

この時、畠山高政は高屋城に入り、三好義継は、飯盛城に入っている（史料 97）。義継が若江にいることは、松永久秀が永禄13年正月に若江に礼に向かったことから判明する（史料 100）ので、それ以前に義継は、飯盛城から若江城に移った模様である。これ以後、飯盛城は史料から姿を消す。北河内で軍事的に重要な城郭は津田城と私部城になり、政戸的な城は中河内の若江城に移動したことになる。

元亀元（1570）年4月、織田信長は上洛命令に従わない朝倉義景を討伐するため、越前に侵入した。この時、浅井長政が裏切ったため、信長は辛苦も京都に引き上げた。6月28日、信長は、近江姫川の戦いで浅井・朝倉連合軍を破るが、三好三人衆が摂津野田・福島で挙兵すると、信長は8月30日、将軍足利義昭を引き連れて三人衆攻めを始める。しかし、9月12日、野田・福島にごく近い大坂本願寺の顯如も挙兵した。しかも、浅井・朝倉軍は北近江から山科・醍醐まで進出したため、9月23日信長は京都に帰り、近江への軍を差し向けた。信長はこれ以後信長包囲網の中で苦しむことになる。

さて、この時期の京都からみて南方勢力には、「南方三好三人衆の事、野田・福島の普請を改め、諸牢人、河内・摂津国端々へ打ち廻し致すと雖も、高屋に畠山殿、若江に三好左京大夫、片野に安見右近、伊丹、塩河・茨木・高槻、何れも城々堅固に相拘へ」（史料 101）とあり、三好三人衆と大

坂本願寺勢力に対して、畠山秋高をはじめとする勢力を書き上げている。このなかにはじめて片野を本拠とする安見右近が登場するのである。河内では、守護クラスである畠山秋高や三好義継と安見右近の名前が併記されるのは、河内の中で私部城の安見右近が一定の統治権を持つ武将となっていたためであろう。更に、右近は、信長上洛以前の畿内での天下再興の戦いの中心人物のひとりであり、このためこのような処遇を受け、畠山・三好とならぶ武家として安見右近の名が挙がったものと思われる。

しかし、元亀2(1571)年5月11日、安見右近は松永久秀によって「西新屋小屋」で切腹した(史料102)。西新屋とは、元興寺極楽坊西側に当たるため、奈良市中で自刃したことになる。この時、松永久秀は、国衆に出陣命令を出したが、どこへの出陣が知らせず、この日、右近が自刃したのである。

この事件をどのように評価すべきだろうか。ひとつは、右近についてである。安見右近は、わざわざ私部から久秀に命じられて奈良市中に来て自刃した。これは、右近がこの段階でも松永久秀の被官であったと見られる。遊佐教が久秀に右近を召し置かせてから、右近は久秀の被官として活動しなければならない立場だったと見られる。

自刃理由は、右近が和田惟政や畠山秋高らと申し合わせて敵になる企てがあったため、腹を切らせたとある。これを見ると、和田惟政と畠山秋高に対して松永久秀は対立関係に入ったことがわかる。久秀は、自刃後の右近の城私部城を攻めた後、三好三人衆とともに高屋城攻めを行っている。松永久秀はこれ以後も度々信長を裏切ることになるが、その最初の行為が安見右近の自刃事件だったのである。

右近は、単身で奈良に来たわけではなく、右近の家臣は奈良不退寺に陣取っていた。これに対して久秀方の菊川衆が対陣していた(史料104)。その後、松永方は、私部城を攻めている(史料

105～110)。しかし、私部城は堅固で落城しなかった。

翌元亀3年4月16日以前、久秀は、再び私部城攻めを始める。この時、城将として名前が挙がるのが安見新七郎である(史料115)。この時、久秀は、私部城攻めのため、私部に相城を造ったが織田勢に囲まれ、4月16日には相城から撤退している(史料112・113)。また、久秀は「ツタノ付城」も4月29日には落城しているので、私部城と津田城は連動して戦いが行われていたことがわかる(史料114)。この時期、若江城の三好義継も松永久秀と同心して本願寺方として戦っており、織田勢をはじめとする軍勢が私部城を護った。松永久秀・織田信長ともに私部城は軍事戦略上重要な城であったことがわかる。

#### 4、私部城の最後

私部城の廃城時期については、具体的に文献に現れるわけではない。馬部氏によれば、私部城が最後に見えるのは『信長公記』天正6(1578)年10月1日条で堺の港で九鬼水軍の大船を見た信長が、住吉から「安見新七郎所」に暫く休息してから京都に上った史料を紹介している(史料116)。若江城のように天正8年8月2日の石山合戦終結で破城しており、私部城もこの時に破城したと考えられる。

なお、安見新七郎自身は、天正9年2月28日の京都での正親町天王の歎観の下の馬揃では、河内の取次者として新七郎の名前があるため(史料117)、河内で健在であったと見られるが、その後については、具体的にはわからない。近世では、安見氏は上杉家を頼ったらしく、直江兼続の配下に安見氏がおり、兼続の娘に本多正信の次男政重が婿入りした時に、政重の家臣に安見氏が加わっている。その後、政重は会津を出て加賀前田家に帰参して家老となった時も、安見氏は同道している(藩老本多蔵品館の展示史料による)。

## 小括

IIをまとめたい。永禄3年の三好長慶による河内支配以後、安見右近は三好に臣従したのか星田に拠点を据えていた。しかし、永禄8年の松永久秀・三好三人衆による將軍足利義輝の暗殺により、安見右近は畿内で最も早く軍事行動を起こした武将のひとりとなる。その後、三好三人衆と松永久秀による対立が先鋭化して両者による戦争が始まった。遊佐教は松永久秀と組んで、安見右近を久秀に預けた。一方、私部郷の旧領主だった鷹山氏は藤寿の代で、私部郷を得ている。

永禄11年、織田信長が上洛を果たすと、私部城は安見右近の城として位置づけられる。しかし、右近は久秀被官であり、久秀の威光に反した右近は、奈良で自刃する。その後、私部城は安見新七郎が守るが、石山合戦後に破城したと考える。

位置づけられる側面があったことである。また、北河内の玄関口としても重要な城であり、南山城、北大和、北河内を繋ぐ重要な役割を果たす城として畿内の政治史に位置づける必要がある。

## まとめ

私部城が築城された時期は、文献史学から明確にはできなかったが、いくつかの点は明らかにできたと思われる。

ひとつは、交野が武家領となったのは、木沢長政の時代であるということである。

二つ目は、鷹山弘頼が私部に居館を構えたと考えられ、私部城の前身の居館を想定する必要がある。その後の鷹山藤政、鷹山藤寿も私部を拠点に活動した兆候がある一方、安見宗房や息子野尻満五郎も私部を押さえていた時期もあり、この時期に私部城が造られた可能性は残しておきたい。

三つ目は、安見右近の評価である。私部城主となつた安見右近は、元々、星田の領主から私部城に移つたと見られるが、これは松永久秀の力に拠るところが大きいだろう。右近が河内のなかで飛びぬけた存在になったのは、信長上洛以前に畿内の戦争に深く関わり、大いに活躍したためである。

四つ目は、私部城は、当初、松永方の城として

## 参考文献

- 交野市教育委員会 『私部城跡発掘調査概要報告書』 I 1995年
- 交野市文化財事業団編 『光通寺』 交野市教育委員会・交野市文化財事業団 1995年
- 片山長三 『交野町史』 交野町役場 1963年
- 鍛代敏雄 「枚方寺内町の構成と機能」(『戦国期の石清水と本願寺』 法藏館 2008年)
- 草野顕之 「一家衆の地域的役割—順興寺と枚方寺内町を中心に—」  
(『戦国期本願寺教団史の研究』 法藏館 2004年)
- 小谷利明 『畿内戦国期守護と地域社会』 清文堂出版 2003年
- 小谷利明 「畠山種長の動向—永正から天文期の畿内—」  
(矢田俊文編『戦国期の権力と文書』) 高志書院 2004年
- 小谷利明 「畿内戦国期守護と室町幕府」(『日本史研究』 510号) 2005年
- 小谷利明 「中世の城郭と文芸」(『大阪春秋』 149号) (株)新風書房 2013年
- 中井 均 「交野城」(『日本城郭体系』第12巻 大阪・兵庫) 新人物往来社 1981年
- 中井 均 「交野城跡と北河内の城跡」  
(『まんだ地域文化誌』第16号) まんだ編集部 1982年
- 中西裕樹 「私部城」(『図説近畿中世城郭事典』) 城郭談話会 2004年
- 野田泰三 「鷹山氏と興福院文書」  
(『古代中世史の探求 シリーズ歩く大和』) 大和を歩く会 2005年
- 馬部隆弘 「城郭由緒の形成と山論—「津田城主津田氏」の虚像と北河内戦国史の実態—」  
(『城館史料学』第2号) 城館史料学会 2004年
- 馬部隆弘 「牧・交野一揆の解体と織田政権」(『史敏』 6号) 史敏刊行会 2009年
- 福島克彦 『戦争の日本史 11 畿内・近国の戦国合戦』 吉川弘文館 2009年
- 八尾市立歴史民俗資料館 『動乱の河内』 八尾市立歴史民俗資料館特別展図録 1993年
- 弓倉弘年 『中世後期畿内近国守護の研究』 清文堂出版 2006年
- 吉田知史 「わたしたちの文化財 私部城跡(交野城跡)」(『ヒストリア』 233号)  
大阪歴史学会 2012年
- 吉田知史 「私部城(交野城)ー信長の河内平定のクサビ、北河内の雄・安見氏の城ー」  
(『大阪春秋』 149号) (株)新風書房 2013年